

大学入試

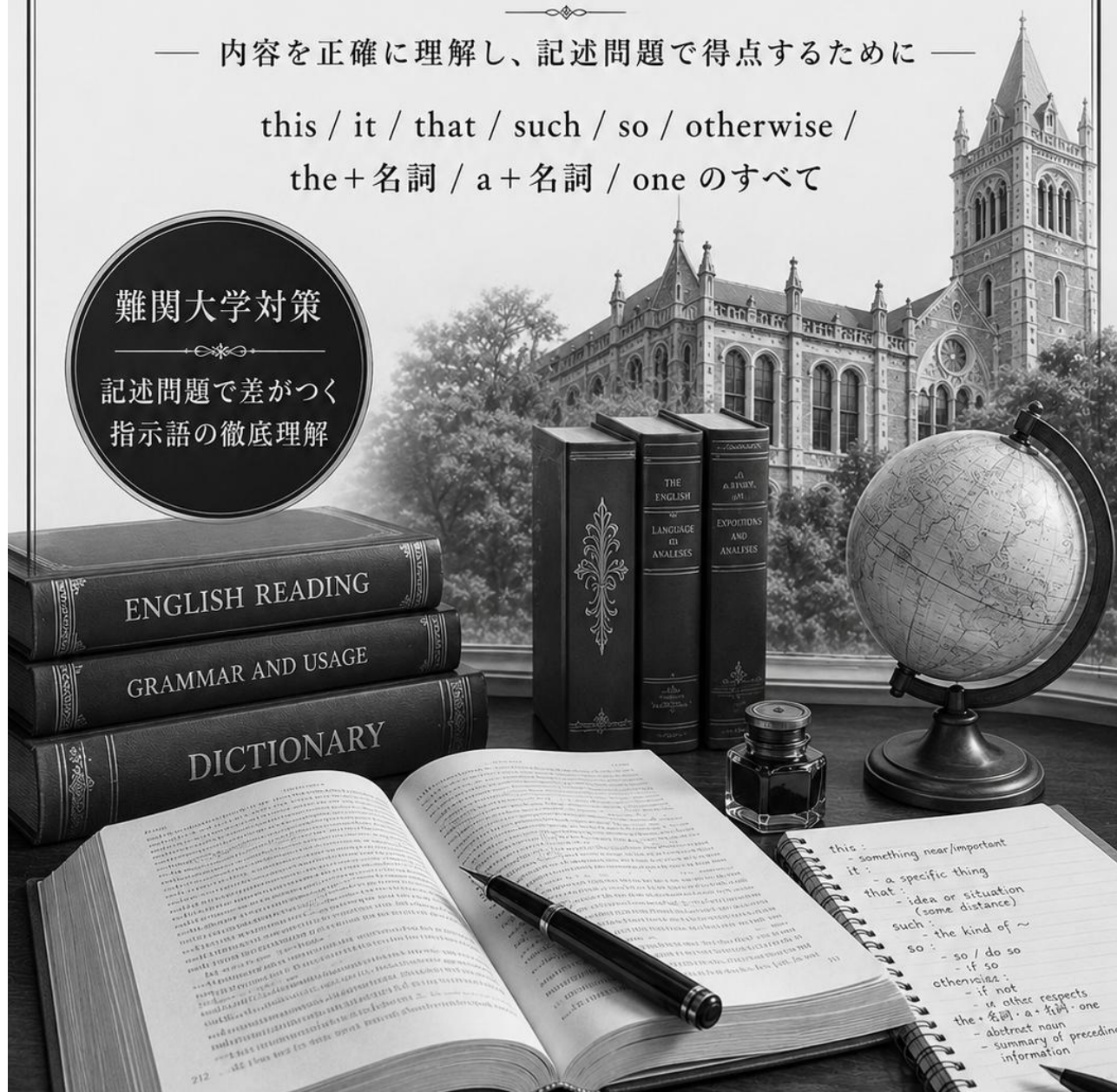
英語長文読解 指示語の読み方

— 内容を正確に理解し、記述問題で得点するために —

this / it / that / such / so / otherwise /
the + 名詞 / a + 名詞 / one のすべて

難関大学対策

記述問題で差がつく
指示語の徹底理解



this : something near/important
it : a specific thing
that : idea or situation (some distance)
such : the kind of ~
so : - so / do so
- if so
otherwise :
- if not
- in other respects
the + 名詞・a + 名詞・one
- abstract noun
- summary of preceding information

1 記述問題の実践的技術— 試験会場で答案を完成させるために —

記述問題では、本文の内容を理解するだけでなく、限られた時間と字数の中で答案を完成させなければなりません。対応箇所がすぐに見つからないこともあれば、書き始めてから字数が足りない、あるいは字数を超えてしまうこともあります。そのたびに最初から考え直しては、試験時間が足りなくなります。

大切なのは、問題ごとに思いつきで答案を書くのではなく、一定の手順に従って処理することです。特に、次の四つを基本原則とします。

≡ 答案作成の基本原則 ≡

① 	基本原則1 満点を狙いすぎず、 <u>80%程度</u> の答案を確実に作る。
② 	基本原則2 考えながら <u>解答欄に書かない</u> 。
③ 	基本原則3 書くべき要素を <u>先にメモ</u> する。
④ 	基本原則4 字数に応じて 情報を <u>加えたり削ったり</u> する。



① 満点を狙いにいかない——80%の答案でよい

記述問題に取り組むとき、多くの受験生は「模範解答と同じような完璧な答案を書かなければならない」と考えます。しかし、試験会場で最初から満点の答案を作ろうとすると、一つの表現に迷ったり、何度も書き直したりして、必要以上に時間を使ってしまいます。

記述問題では、最初から満点を狙う必要はありません。まず目指すべきなのは、設問に答え、本文中の主要な要素を含んだ 80%程度の答案です。

例えば、答案に必要な要素が三つあるとします。

- ・制度の仕組みが複雑である
- ・十分な説明がない
- ・利用者が制度を信用できない

このうち、最も重要な二つを正確に書くことができれば、満点ではなくても、一定の部分点を得られる可能性があります。反対に、三つすべてを美しくまとめようとして長時間考え、最後まで答案を完成できなければ、得点にはつながりません。

試験全体で考えると、一問で満点を取ることも、すべての記述問題で安定して部分点を取る方が重要です。80%程度の答案を早めに完成させ、時間が残ったときに不足している要素や日本語表現を修正する方が、実戦的な解き方です。

記述問題は得点源にできる

多くの受験生は記述問題に苦手意識を持っています。「何を書けばよいか分からない」「模範解答のように書けない」と考え、空欄にしたり、十分な答案を書けなかったりします。

しかし、だからこそ、記述問題は周囲の受験生と差をつけやすい問題でもあります。英文解釈問題では、構文の取り違い、単語の誤訳、修飾関係の誤りなどが答案全体に影響し、一つの重大な誤りによって大きく減点されることがあります。それに対して、内容説明型の記述問題では、必要な要素ごとに点数が配分されていることが多く、表現が模範解答と完全に一致しなくても、本文の重要な内容が含まれていれば部分点を得られる可能性があります。

例えば、六点の問題で三つの必要要素がある場合、一つの要素について二点ずつ配点されていることがあります。このとき、一つの表現に多少不自然な部分があっても、三つのうち二つを正しく書ければ、一定の得点を確保できます。したがって、記述問題は「完璧に書けなければ得点できない問題」ではありません。むしろ、必要要素を見つけ、答案として残す技術を身につければ、英文全体を正確に訳す英文解釈問題よりも、部分点を積み上げやすい場合があります。記述問題が苦手な受験生が多いからこそ、基本的な答案作成の技術を身につければ、安定した得点源にできます。

注意

80%でよいというのは、適当に書いてよいという意味ではありません。本文に根拠のある主要な要素を確実に入れ、設問に答える答案を完成させるということです。分からない部分にこだわって答案全体を空欄にするより、分かる部分を正確に書いて部分点を確保します。

② 考えながら解答欄に書かない

記述問題でよくある失敗は、対応箇所を見つけると、内容を十分に整理しないまま解答欄へ書き始めてしまうことです。書いている途中で新しい要素に気づき、文の形を変えようとして、主語と述語が合わなくなったり、同じ内容を繰り返したりします。途中で消して書き直すうちに、答案が読みにくくなることもあります。解答欄は、考える場所ではありません。解答欄は、考え終わった内容を清書する場所です。対応箇所を見つけたら、まず問題用紙の余白に、答案へ入れる内容を短くメモします。完全な文章を書く必要はありません。重要な名詞や動詞を並べるだけで十分です。

例

本文から抜き出した必要要素

- ・複数の情報を集める
- ・異なる意見を比較する
- ・自分で判断する

この三点を確認してから、複数の情報を集めて異なる意見を比較し、自分で判断すること。のように一文へまとめます。

最初から自然で美しい日本語を作ろうとすると、本文の重要な要素を落としやすくなります。まず内容を確保し、その後で文章の形を整えることが重要です。

注意

メモには、本文の英文を長く写す必要はありません。「誰が」「何をする」「なぜ」「どのような結果になる」といった答案の骨格だけを書きます。メモが長すぎると、メモを作ること自体に時間がかかります。

③ 答案の「骨格」を先に作る

答案を作るときには、最初に文の骨格を決めます。骨格とは、答案の中心となる「主語・述語・文末」です。

「なぜか」と問われているなら、[原因・理由]ため。という形を先に作ります。

「どのようなことか」と問われているなら、[具体的な内容]こと。という形にします。

この骨格を決めずに本文の語句を並べると、文末に近づいたところで文章がつながらなくなったり、理由と結果が逆になったりします。

例

設問

人々がその制度を受け入れなかったのはなぜか。

必要要素

- ・制度の仕組みが複雑
- ・十分な説明がない
- ・信頼できない

骨格

[制度を信頼できなかった理由]ため。

答案

制度の仕組みが複雑で、十分な説明もなく、信頼することができなかったため。

このように、先に答案の終わり方を決めておくと、途中の情報を並べやすくなります。

チェック

- ☐ 設問に合った文末を決めたか。
- ☐ 主語と述語が対応しているか。
- ☐ 理由と結果の関係が逆になっていないか。
- ☐ 「～ため」「～こと」まで含めて一文が完成しているか。

④ 字数が足りないときの対処方法

答案が指定字数より大幅に短い場合、必要な情報が抜けている可能性があります。ただし、字数が短いからといって、意味のない言葉を付け加えてはいけません。本文と設問を見直し、答案に入れるべき要素を落としていないか確認します。

字数が足りないときは、次の順番で見直します。

1 主語や対象が抜けていないか

「利用できないため」だけでは、誰が何を利用できないのか分かりません。インターネット環境の整っていない家庭の子どもが、オンライン教材を十分に利用できないため。のように、必要な主語や対象を補います。

2 理由や条件が複数ないか

本文に A と B の二つの理由があるのに、A だけを書いていないか確認します。and、both、not only、another などを見落としていないかを見直します。

3 抽象語を具体化できないか

× 情報を判断する能力。

○ 複数の情報を比較し、その信頼性を判断する能力。

「能力」「変化」「問題」などの抽象語だけで終わっている場合は、その具体的な内容を補います。

4 因果関係の途中が抜けていないか

× 道路を広げても渋滞が起きること。

○ 道路を広げると自動車を利用する人が増え、その結果、再び渋滞が起きること。

字数を増やすときは、形容詞や副詞を適当に付け加えるのではなく、本文にある必要情報を回収することが基本です。

注意

「非常に」「さまざまな」「多くの」「しっかりと」などを根拠なく加えて字数を増やしてはいけません。本文にない程度・数量・評価を加えると、意味が変わることがあります。

チェック

- ☐ 主語・対象・行動がそろっているか。
- ☐ 複数の理由や条件を落としていないか。
- ☐ 抽象語を具体的に説明できているか。
- ☐ 原因から結果までの過程が抜けていないか。
- ☐ 本文にない修飾語で字数を増やしていないか。

⑤ 字数が多すぎるときの対処方法

指定字数を超えた場合、いきなり文章全体を短くしようとすると、必要な情報まで削ってしまいます。まず、答案を「絶対に必要な要素」と「削っても意味が変わらない部分」に分けます。

削るときは、次の順番で考えます。

1 本文の具体例を削る

× 新聞、テレビ、SNS などの複数の情報源を比較すること。

○ 複数の情報源を比較すること。

新聞・テレビ・SNS は「複数の情報源」の具体例なので、字数が厳しい場合は上位概念にまとめられます。

2 同じ内容の繰り返しを削る

× 自分自身で自ら判断すること。

○ 自分で判断すること。

× 将来の未来を予測すること。

○ 未来を予測すること。

3 長い表現を短い語に置き換える

× 利用することができない。

○ 利用できない。

× 決定を行う。

○ 決定する。

× 人々がお互いに意見を交換する。

○ 人々が意見を交換する。

4 不要な修飾語を削る

中心内容に関係しない形容詞や副詞は削れます。ただし、only、almost、rarely、not always など、意味を限定する語は安易に削ってはいけません。

5 背景説明を削る

設問が直接の理由だけを求めているなら、その前に書かれている背景まで答案に入れる必要はありません。読むときには広い文脈を確認しますが、答案には問われた内容だけを書きます。

注意

短くすることを優先して、否定・比較・条件・程度を削ると、本文と異なる意味になることがあります。

- not all「すべてが～というわけではない」
- only「～だけ」
- more than「～より多い」
- unless「～しない限り」
- partly「一部は」

このような内容は、答案の正確性に関わるため、原則として残します。

チェック

- ☐ 具体例を上位概念にまとめられないか。
 - ☐ 同じ意味の言葉を繰り返していないか。
 - ☐ 長い表現を短い日本語に置き換えられないか。
 - ☐ 設問に不要な背景説明が入っていないか。
 - ☐ 否定・限定・比較・条件を誤って削っていないか。
 - ☐ 必要な要素を残したまま字数を減らしているか。
-

⑥ 指定字数は情報量の目安でもある

「40 字以内」であれば、40 字ぴったりに書かなければならないわけではありません。しかし、20 字程度しかない場合は、本文の重要な要素を落としている可能性があります。反対に、指定字数ぎりぎりまで書こうとして、不要な情報を詰め込む必要もありません。大切なのは、設問に必要な内容が過不足なく入っていることです。指定字数の八割程度を一つの目安にできますが、これは絶対的な規則ではありません。短い答案でも必要要素がすべて入っていれば得点できます。逆に、字数をほぼ使い切っていても、設問と関係のない内容が多ければ高得点にはなりません。字数は、答案の内容を整えるための「器」です。器を埋めること自体を目的にはいけません。

チェック

- ☐ 指定字数に対して極端に短くなっていないか。
 - ☐ 字数を埋めるためだけの表現が入っていないか。
 - ☐ 必要な要素を入れた結果として適切な長さになっているか。
 - ☐ 最後に句読点を含めて字数を確認したか。
-

⑦ 該当箇所が見つけないときの対処方法

対応箇所が見つからないときに、本文を最初から何度も読み直すのは効率的ではありません。先に設問の言葉を分析し、本文のどのような表現を探すべきかを決めます。

1 設問の中心語を確認する

例えば、Why did the researchers question the usefulness of the system? であれば、中心語は次の四つです。researchers / question / usefulness / system ただし、本文では同じ語がそのまま使われるとは限りません。question は doubt、be skeptical of、raise concerns about などに、usefulness は effectiveness、value、benefit などに言い換えられることがあります。

2 設問の語の「言い換え」を探す

設問: people could not afford computers

本文: computers were too expensive for some families

設問:the plan failed

本文:the plan did not produce the expected results

単語が一致しなくても、意味が対応していれば該当箇所です。

3 論理を示す語を探す

理由を問う問題なら、because、since、as、for、due to、one reason などを探します。結果を問う問題なら、therefore、thus、as a result、lead to、cause などが手掛かりになります。ただし、答えが必ず論理語の直後にあるとは限りません。コロン、ダッシュ、対比、具体例によって説明されることもあります。

4 下線部の近くから確認する

下線部説明問題では、答えが下線部の近くにある場合が多くあります。まず同じ文、次に前文、続いて後続文を確認します。いきなり段落全体や本文全体を読み直すのではなく、近い範囲から広げます。

5 段落の役割を考える

設問が理由を問っているなら、主張の後に理由が置かれていることがあります。具体的内容を問う場合は、抽象的な文の直後に説明や具体例が続くことがあります。

この段落が「主張・理由・具体例・反論・結論」のどれに当たるのかを考えると、探す範囲を絞ることができます。

注意

同じ単語が見つかっただけで、そこを正解箇所と決めてはいけません。設問と本文の論理関係が一致しているかを確認します。

チェック

- ☐ 設問の中心語を二～四語に絞ったか。
- ☐ 本文中の言い換え表現を考えたか。
- ☐ 理由・結果・対比を示す語を探したか。
- ☐ 下線部に近い文から順番に確認したか。
- ☐ 段落の役割を考えて探す範囲を絞ったか。
- ☐ 単語の一致だけでなく、内容と論理を確認したか。

⑧ 該当箇所が複数あるときは、共通部分をまとめる

設問によっては、答えの根拠が一文にまとまっておらず、複数の文や段落に分かれていることがあります。この場合、どれか一つだけを選ぶのではなく、設問に必要な情報をそれぞれの箇所から集めます。ただし、見つけた内容をすべて答案に並べると長くなります。まず各箇所の共通点を考え、上位の表現へまとめます。

例

本文中の具体的内容

- ・教師から学ぶ
- ・友人から助言を受ける
- ・過去の失敗を振り返る

まとめ

他者から学び、過去の経験を振り返ること。複数箇所に根拠がある問題では、「情報を集める段階」と「答案にまとめる段階」を分けることが重要です。

チェック

- ☐ 根拠が複数箇所に分かれていないか。
- ☐ 各箇所から必要な要素だけを抜き出したか。
- ☐ 具体例を共通する表現にまとめられないか。
- ☐ 同じ内容を重複して書いていないか。

⑨ 分からない一語に止まりすぎない

記述問題では、本文中の一語が分からなくても、文全体や前後関係から答案を作れる場合があります。一つの単語に時間をかけすぎると、文章全体の流れを見失います。未知語があった場合は、次の点を確認します。

① 語源、接頭辞、接尾辞を考える〈単語分解〉

un-
否定・反対

believ
信じる

-able
～できる

unbelievable
(信じられない)

「信じることができない」→
驚きや強い否定の意味かも!

語源	接頭辞	接尾辞
ラテン語 believe 「信じる」	un- 「否定」	-able 「～できる」

② 肯定的か否定的か

+

肯定的

-

否定的

ヒントになる語

- ・ un-, in-, im-, non-, dis-
- ・ not, never, no, none
- ・ without など

否定の接頭辞がついているぞ!

③ 対比、逆接に注目する

対比

Aは～だ。
しかし、Bは～だ。

A

not/even
but/however

B

逆接

～だが、実際は～だ。
～のに、～。

予想・常識

実際・事実

ここがポイント!
意味が反対になっている!

④ 前後に言い換えや具体例がないか

つまり、言い換えると、換言すれば、すなわち、……など

たとえば、具体的には、例を挙げると、～のように、……など

言い換え・具体例を見つけると…

- ✓ 意味がつかめる!
- ✓ イメージがわく!
- ✓ 本文の理解が深まる!

未知語の厳密な意味が分からなくても、答案にその語の正確な訳が必要でない場合があります。その場合は、分かる内容を中心に答案をまとめます。

注意

未知語を勝手な意味で断定してはいけません。推測に自信がなければ、その語に強く依存しない表現で答案を作る方が安全です。

チェック

- ☐ 未知語の品詞と文中での役割を確認したか。
 - ☐ 前後に言い換えや具体例がないか探したか。
 - ☐ 一語が分からなくても、文全体の関係をつかめないか。
 - ☐ 不確かな訳語を答案の中心に置いていないか。
-

⑩ 時間が足りないときは、部分点を取りに行く

記述問題を完全に解こうとして一問に長時間を使うと、後の問題に手が回らなくなります。対応箇所は分かるが日本語がうまくまとまらない場合は、まず必要要素を含んだ 80% 程度の答案を作り、次の問題へ進みます。満点の答案を目指して何度も書き直すより、主要な要素を二つ、三つ入れて部分点を確保する方が、試験全体では有利です。時間が残れば、最後に戻って日本語を整えたり、不足する要素を補ったりします。記述問題は、模範解答と同じ表現を書かなければ得点できない問題ではありません。必要な要素が入っていれば、その部分について得点できる可能性があります。

完璧な一問よりも、80%の答案を複数残す。

これが、試験全体の得点を高めるための考え方です。

注意

空欄のまま残せば得点はありません。設問と対応箇所がある程度分かっているなら、本文の中心内容を使って答案を残します。ただし、本文にない推測を書いて解答欄を埋めてはいけません。

チェック

- ☐ 一問に時間をかけすぎているか。
 - ☐ 満点ではなく 80% の答案を先に完成させたか。
 - ☐ 完璧な表現より必要要素の確保を優先したか。
 - ☐ 分かる範囲で本文に基づく答案を書いたか。
 - ☐ 後で見直す問題に印を付けたか。
 - ☐ 空欄のまま次へ進んでいないか。
-

答案作成の実践手順

- ① **設問を分類する**
理由・内容・目的・結果・指示内容のどれを答えるか確認する。
- ② **対応箇所を探す**
設問の中心語、言い換え、論理語を手掛かりにする。
- ③ **必要要素をメモする**
誰が・何を・なぜ・どのように、を短く書き出す。
- ④ **答案の骨格を作る**
「～ため」「～こと」など、文末を先に決める。
- ⑤ **80%の答案を作る**
主要な要素を入れ、まず答案を完成させる。
- ⑥ **字数を調整する**
短ければ必要要素を補い、長ければ具体例・重複・不要な背景を削る。
- ⑦ **解答欄へ清書する**
内容が決まってから、読みやすい字で書く。
- ⑧ **時間が残れば改書する**
不足する要素、日本語の不自然さ、字数を見直す。

